（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏　名　　麻　生　享　志

麻生享志氏の論文「ジョン・デューイにおけるプラグマティズムの真理観の研究」は、アメリカのプラグマティズムの完成者と目され、今日R.ローティーの哲学に大きな影響を与えているデューイの特異な論理学について、その全容に迫るべく、多面的な角度から徹底的な検討を企てたものである。デューイの論理学の最大の特徴は、徹頭徹尾、「実験」を介した「探究」という実践として論理や知識を捉えていくところにあり、麻生氏は、そのことを、旧来の命題中心の論理観、対応説的真理観、探究の状況から概念を切り離して捉える実体化の傾向、などに対する批判とともに、「保証付きの当面可能的言明」という形で真理を捉え返す「可謬主義」の論理学として丁寧にたどり直している。とりわけ麻生氏が強調的に描き出そうとしているのは、探究の諸相に渡って現れる主観的要素と客観的要素との相関のありようである。麻生氏は、この両要素の相関は判断における主語と述語の関係として現れると押さえ、コントロールされた探究の最終的判断が是認されるのは、主語の客観的要素と述語の主観的要素とが結びついているときだけであると捉える。そして、普遍的命題と存在的命題、帰納と演繹、存在的と可能的、といった探究の中で協力し合う契機は、すべて主観的要素と客観的要素との相関として捉えられると論じるのである。こうした基本的理解にのっとって、麻生氏は、デューイ論理学の広がりに目を配っていく。たとえば、デューイ論理学が倫理学に適用された場合には、道徳原理から天下り的に道徳を論じるような立場を排し、具体的な問題状況に即して探究を行う小倫理主義の立場が帰結するとしたり、民主主義における投票制度が実験結果の頻出によって仮説の蓋然性を高めるという探究の過程と類似している点から、投票制度に対して一定の肯定が与えられることになる、などと論じている。また、経済学における合理性の問題も、「意思決定」の問題と絡めて、デューイ論理学の応用場面として詳しく言及されている。全体として、デューイの論理学と真理観の特徴がきわめて印象的に浮き彫りにされているといえる。

麻生氏の論文は、デューイ哲学の意義を積極的かつ肯定的に描き出そうという意図に貫かれたものであり、それゆえに、対立する考え方への理解がやや弱い面もあるにはある。しかし、これほど体系的かつ首尾一貫した形で展開されたデューイ研究はわが国でも貴重であり、博士（文学）の学位を授与するに十分値する論文であると判断する。